

冬期サガルマータ南西壁の攻略

尾形好雄

1991年、群馬県山岳連盟は創立50周年の記念事業としてサガルマータ（エベレスト）南西壁の冬期初登攀を目指したが、想像を絶する烈風の前に無念の涙を呑んだ。

12月1日の登山開始以来、71日間もの長期にわたって粘ったが、女神の微笑は得られず、12月中旬に到達した最高到達点の8,350mを越えることが出来なかった。二度、三度とファイナル・キャンプに到達しながら、あと一歩が進めなかった。

烈風に襲われるなどの要因もあったが、アタック態勢が確立出来なかったのは、我々の力不足があったことも確かであった。

烈風、極寒の悪辣な条件下での長期間にわたる登山活動は、高所衰退による体力低下はもとより、闘志を萎えさせ、士気の低下を引き起こした。2月に入って誰も公然と敗北を認める気持ちはなかったにしても、徐々に敗北感が隊員ひとりひとりの心の中に浸透していったように思う。誰でもいいから早くこの忌々しい冬の南西壁を片付けてくれ、というのが本音ではなかったろうか。厳しい条件下で、隊員、シェルパ達は疲れ果て、あれ以上の行動は無理であったように思う。まさしく完敗であった。

短期速攻攻略

1年の充電期間において我々は、再度サガルマータ南西壁へ挑むチャンスを与えられた。二度目の挑戦となると「絶対に失敗は許されない」というプレッシャーが両肩に重くのしかかる。同じ失敗は許されず、徹底的に前回の敗因を分析し、検討が加えられた。

冬のヒマラヤが春・秋のノーマル・シーズンと違うところは、冬独特のジェット・ストリームと呼ばれる偏西風が吹き荒れる凄まじい烈風であり、もうひとつはマイナス50度にも下がる極寒である。勿論、冬であるから短い日照時間もひとつのマイナス要因として加わる。

これらのうち、寒気のほうは、最近のすばらしい新素材で作られた防寒装備で十分凌げることは前回の経験から知り得た。問題は風である。冬のジェット・ストリームがひとたび吹き荒れると、手も足も出ないことを身をもって痛感させられた。

前回、冬の南西壁に立ち向かうにあたり、「風と寒さと落石」は口にすまい、と覚悟の上で出掛けた。しかし、失敗してみてそれがどれほど不遜なことであったか、思い知らされた。

冬の南西壁を攻略するには、この冬の嵐が吹き荒れる前に決着つけなければ難しいだろう、ということは前回も承知のうえで出掛けた。唯、長い冬のあいだには何度か穏やかな小康状態の時もあるだろう、と甘い期待を持って、75日間分の食糧・燃料を用意して臨んが、前回は12月1日の登山開始以

5. 研究論文

来, 71日間にも及ぶ長期にわたって粘ったにもかかわらず, 12月21日以降はその大半が烈風の収まりを待つ忍耐の日々であった。前回の経験からいうと一度烈風が吹き荒れると, もう12月上旬のような穏やかな日が続くことはなく, 風が収まってもほんの2, 3日で, また吹き荒れるようになり, せっかく上部キャンプに移動しても翌日また追い返される, といった無駄な行動を強いられた。

この一度だけの拙い経験ではあるが, 二度目は何としてもこの烈風が吹き出す前に決着をつける事で, さらなる検討が加えられた。

では, この冬の嵐はいつ吹き出すのか, ということになるが, 今のところ定かでない。これまでは漠然とクリスマス頃といわれてきたが, 年によっても当然違うであろうし, なんともいえない。ラマ教(チベット密教)の敬けんな信者であるシュルパ達は, 大宇宙観から冬至を境に冬の気候が変わると信じており, 案外そのへんが真理なのかもしれない。やはり, 遅くとも12月20日前頃までに決着をつけないと難しいように思われた。

そこで二度目は, さらに余裕を見て12月15日までに決着をつける短期速攻の基本戦略を立てることにした。8,848mの世界最高峰を15日間で陥す, というのだから, かなり過激な基本計画といえた。

ちなみに, 1975年秋にクリス・ボニントンの率いる英国隊がこの南西壁を初登攀したときの所要日数は33日間で, 当時としてはノーマル・ルートを含めてもこれが最短期間での登頂となり, 高く評価された。それを今回はその半分の日数で登ってしまおうというのである。

他人はしかも冬に, というが, 我々にいわせれば, 冬だからこそ可能性があったのである。前回の経験から知り得たことであるが, 冬の南西壁は取り付きのベルクシュレントからロック・バンドの核心部までの約50ピッチの殆どが氷雪壁にルートを取る事が出来るのである。春のように岩が露頭してスラブに悩まされたり, 秋のように深い積雪で雪崩に脅かされることもなく, 懸念された落石も思ったほどひどくはないのである。壁のコンディションとしては冬が一番のように思われた。

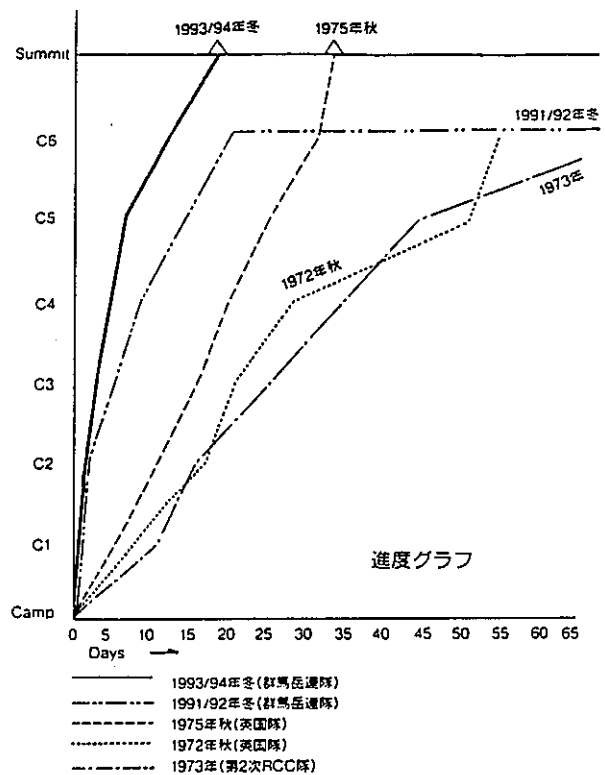


図1

前回、BCからわずか16日間という短期間でロック・バンドの核心部を突破して8,300mラインに到達出来たのもそのせいである。

このように短期速攻戦略に関しては自信があった。あとはいかにして隊員をこのスピーディな登攀が出来るように仕上げるか、が課題であった。

前は春にカンチェンジュンガ(8,586m)でプレ登山を実施して本番に臨んだが、秋の1シーズンが空いたこともあってか、高度順化の面では余り効果は見られなかった。そこで今回は、本番直前の秋にチョー・オユー(8,201m)でプレ登山を行うことにした。

このプレ登山計画に対しては、本番直前に8,000m峰に登っては高度順化どころか、高所疲労が残って本番ではかえってマイナスになるのでは、と危惧する声も聞かれた。確かに高所疲労を残さず高度順応のうまいところだけを残せるか、という点では一抹の不安はあった。しかし、我々には身近によい手本となる実例があった。

1983年の秋から冬にかけてローツェからエベレストへの継続登頂を果たしたカモシカ同人隊の例がそれである。既に10年前に偉大なる先輩達が実践していることに勇気を得て、我々は秋にチョー・オユーのプレ登山に向けて出発した。

チョー・オユーでのプレ登山

プレ登山の基本計画は、ノーマル・ルート(西北西稜)から前進キャンプを3つ設ける包囲法で、登山期間は2週間ほどで登るものであった。また、サガルマータ南西壁では7,600m以上で睡眠及び行動用に酸素を使う計画なので、チョー・オユーでも同じく酸素を使用することにした。この酸素使用の第一の目的は、プレ登山では高所疲労を残さないためであった。無酸素でよだれを流しながらヨレヨレになって登ることは我々に許されないことであった。身体にダメージを受けての登頂では、プレ登山の意味がないのである。

さらに隊員の疲労軽減のために、各キャンプの荷上げも、原則としてシェルパに委ねることにした。そのためにネパールからサダーのほか、高所ポーター6名、キッチン・スタッフ3名を同行した。

9月14日から29日のあいだに3隊に分かれてジャブラ河の大本営(4,750m)に入り、その後、裏山で3日から5日かけて5,500mまでの高度順応訓練を行った。この高度の順応が出来上がった者から順次BCへと移動した。

BCへの移動は、途中で仮キャンプ(5,100m)を設けて2日かけて行った。但し、夏にパキスタンのブロード・ピークに登頂している3次隊の田辺、江塚の2名は、この順応訓練なしで直接BCに入った。海拔1,340mのカトマンズからわずか3日で一気に5,650mのBCに入れるのであるから、プレ登山の効果は抜群といえた。

隊員達が順次BCに集結しているあいだに、シェルパ達によって上部キャンプへの荷上げが行われ、9月25日にC1(6,400m)、27日にC2(7,000m)がそれぞれ建設された。

5. 研究論文

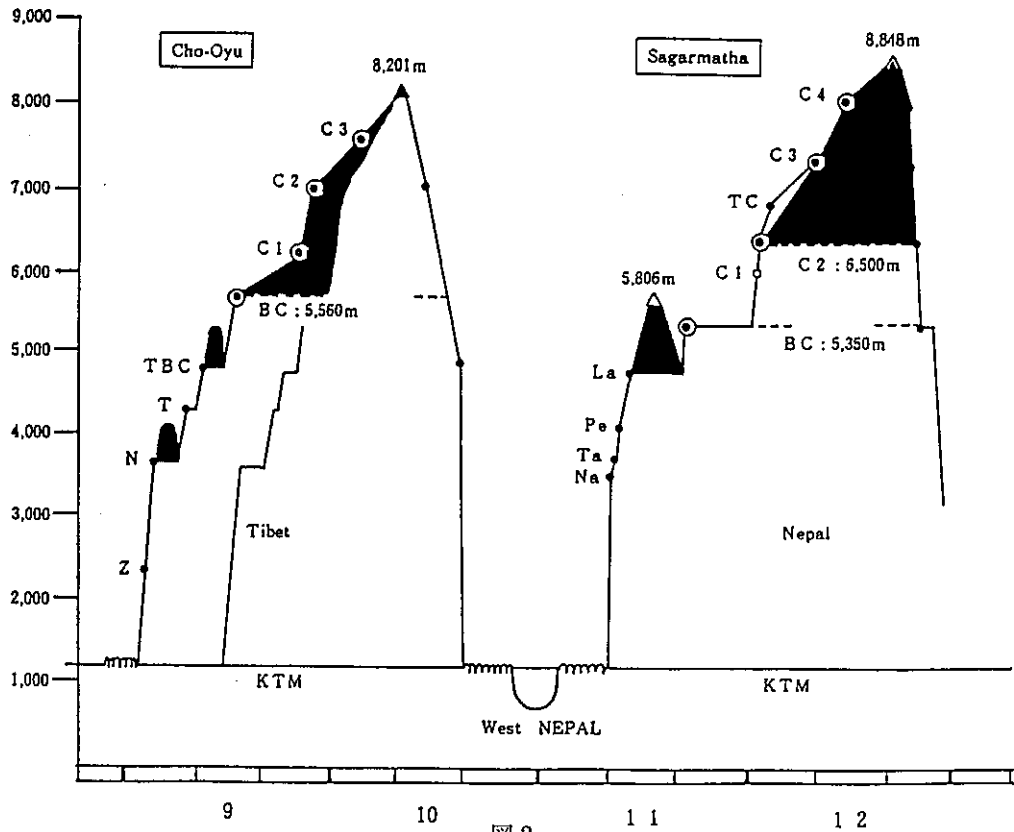


図 2

その後、10月4日にC3 (7,600m) を建設してアタック態勢が出来上がった。

まず、第1次隊として10月8日に尾形、名塚、佐藤、後藤、星野、秋山の6名が登頂した。C3からの所要時間は2時間40分で、9時56分(北京時間)に登頂。このパーティは、尾形を除く5名がC3までのルートワークで7,600mまでの高度を体験し、その後C1で1日休養してアタックに向かった。尾形は年齢を考えてC3の往復はせず、C2を2度往復しただけでBCに戻り、1日休養してからC1に移動して他の5名と合流してアタックに向かった。

続いて第2次隊として10月11日、ブロード・ピークを登ってきた田辺、江塚とパサン・ツェリンが登頂した。また、同じ日C2から一気にアタックをかけたロブサン・サンブーも登頂した。2次隊のC3からの所要時間は1時間50分で9時50分に登頂。田辺、江塚の二人はC2を一度往復しただけで、あとは一気呵成に頂上まで登りきってしまった。

第3次隊は10月12日に八木原、宮崎、吉田、寺田それにサキヤ、ダワ・ツェリンの6名が登頂。さらに同日、C2からアタックしたニマ・ドルジェ、ミンマ・ノルブも登頂した。3次隊のC3からの所要時間は約3時間で10時30分に登頂。このパーティは高齢者グループだったので、C2の往復は一度だけで、あとはBCでたっぷり休養を取ってから頂上アタックに向かった。

参考までに各パーティのC3から頂上までの所要時間を記したが、このスピードと早い登頂時刻のお陰で、いずれのパーティも登頂後、その日の内にBCまで下ることができたのである。

BC入りしてから登頂までの所要日数は、別表1の通りである。いずれも10日から17日で登っており、ほぼ計画通りの日数で登頂を果たすことができた。

こうしてチョー・オユーでのプレ登山は、酸素を使った短期速攻登山のお陰で、外見上はほとんど疲労が見られない状態で終了することができた。

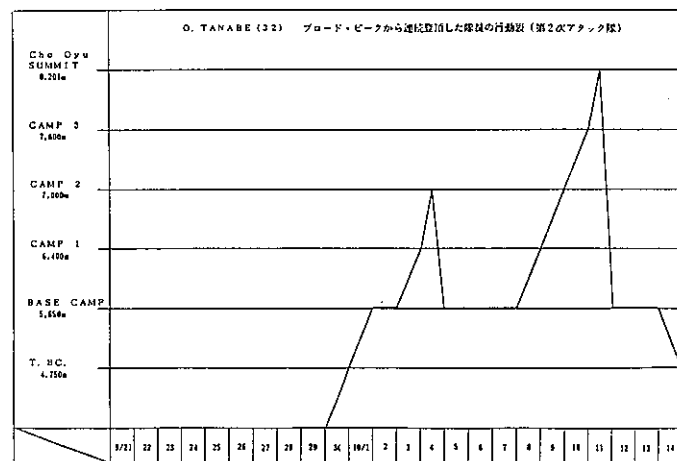
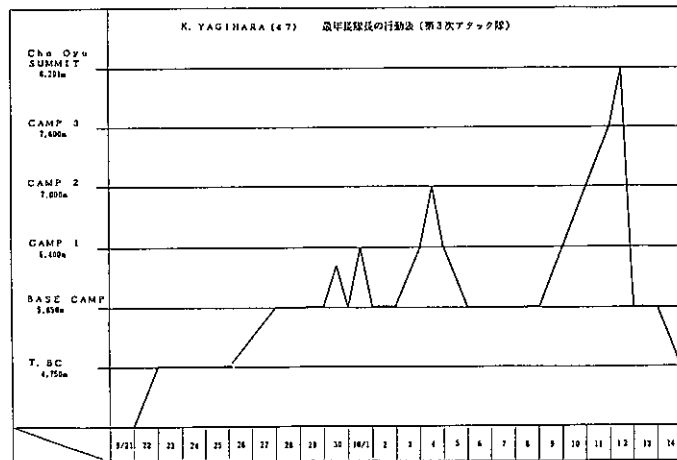
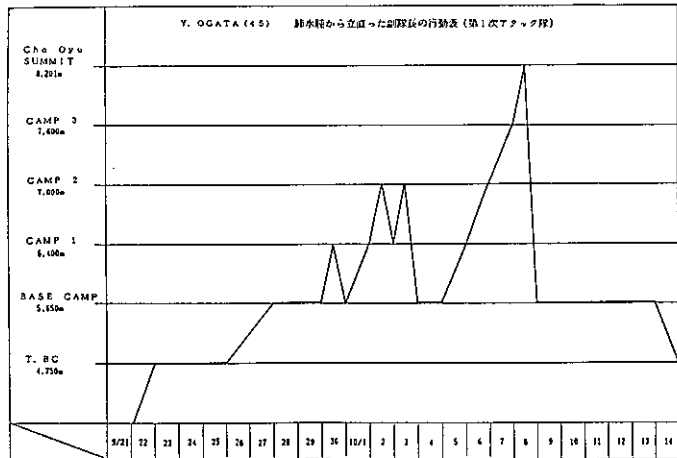
はたしてこの短期間でどれだけの高度順応が獲得でき、その後の約3週間でどれだけ休養が図れるか、全ては本番での答が待たれることになった。

唯、若い隊員にとってチョー・オユーの頂に立った、という自信はメンタル面で大きな効果があったことは確かであった。

本番前の休養

チョー・オユーでのプレ登山を終えた我々は10月17日の早朝カトマンズに戻った。

プレ登山後の休養をどうとるかについては、出発前から種々討議した。



別表1

5. 研究論文

前述した1983年のカモシカ同人隊は、秋のローツェ登山終了後、ジャンボチェ（3,833m）に下り、エベレスト・ビュー・ホテルに約3週間逗留して休養を取り、再びエベレストのBCに戻って、冬期登山を開始した。

その時の冬期エベレスト登頂者であるサーダーのナワン・ヨンデンは、余り長い間カトマンズ辺りの低所に滞在していると、秋のプレ登山効果が無くなってしまい、と心配する。カトマンズの滞在はせいぜい1週間ぐらいがベターであろう、忠告する。

一方では、短い休養期間だからこそ、カトマンズよりもっと高度の低いポカラ（915m）やタライ（平均海拔200m）などで休養を取るべきではないか、との考えもあった。

結局、最終的にはどのような休養がよいのか分からないまま、とりあえず休養することだけを念頭において、普段なかなか足を延ばすことの出来ない西ネパールへと出掛けたのである。

ダサインの大祭でカトマンズが休みに入った、10月25日我々は西ネパールへと旅たった。カルナリ河に完成したばかりのサスペンション・ブリッジを渡り、ネパールの西の果てバイタリまで足を延ばして、アピ、ナンパ山群はもとより、遠くインドのクマオン、ガルワールの山並を眺望した。帰路はチトワン国立公園に立ち寄り、エレファント・サファリなどに遊んで命の洗濯をした。

こうしてタライ地方で1週間過ごした後、再びカトマンズに戻り、いよいよ本番に向けて隊荷の送り出しを開始した。

結局、プレ登山後の休養は、タライ地方で1週間、カトマンズで2週間過ごしたことになる。この休養がベストであったかどうかは分からないが、結果的に見てベターであった事は確かであったように思われる。

プレ登山の効果

チャーター機による隊荷の送り出しを終え、いよいよ我々は本番の冬期サガルマータ南西壁へと向かった。

隊荷輸送はすべてサポート隊員とシェルパに任せ、隊員はカトマンズから空路ジャンボチに入った。

11月9日と10日の2隊に分かれてナムチェ・バザールに到着。早速、隊員のパルスオキシメーター測定を実施した。隊員の測定結果は、いずれも90～92%の高い数値を示し、まずはホッとした。ちなみに東京での測定値は98%であった。

チョー・オユウでの高度順応はまだ残っているように思われた。これはBCへ向けてキャラバンを進めていくなかで、ますます確信を強くした。

図3のようにキャラバン2日間目のタンボチェ（3,867m）での測定結果も90%以上で、若い星野隊員などは96%と東京並みの値を示した。

3日目、4,000mを越えたペリチェ（4,243m）でも91%と変わらず、初期高度障害に苦しむトレッカーを尻目に夜の酒量も上がる。

高度と酸素飽和度の変化
(サガルマータ)

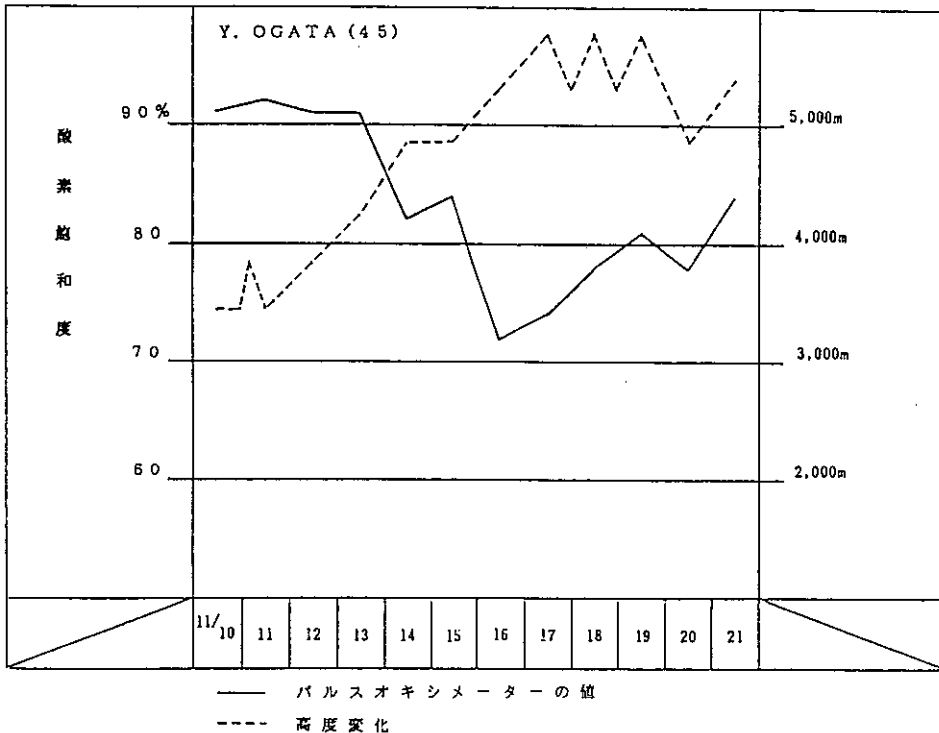


図3

4日目、5,000m台に近いロブジェ（4,930m）に上がってようやくパルスオキシメーターの値は82～88%となった。

我々はこのロブジェに6日間滞在して、最後の仕上げにかかった。

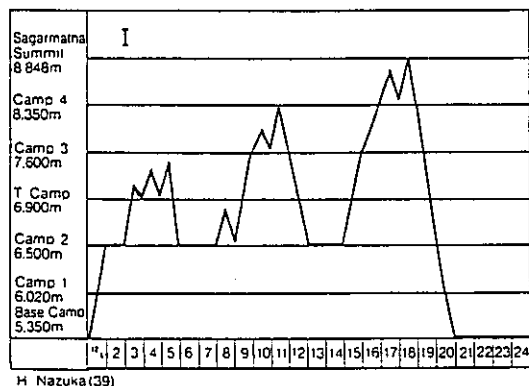
今回のサガルマータ短期速攻作戦は、12月1日の冬期幕開けと同時に一気にC2（6,500m）を建設しよう、という計画であり、この初日から高度差1,150mの移動と6,500mの高度での宿泊に一抹の不安があった。

そこで、BCに入る前にできるだけ高い高度での宿泊経験をしておきたいと考え、色々物色したが、なかなか適当な山が見つからず、少々高度は低かったが、前回同様ポカルデ・ピーク（5,806m）で行うことにした。

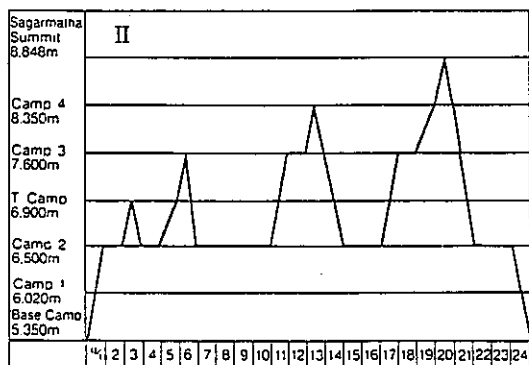
ロブジェからクーンブ氷河を横断し、コンマ・ラ（5,535m）を越えて、眼下の氷河湖々畔にC1（5,460m）を設け、さらにポカルデの頂上直下にC2（5,770m）を建設、このC2に最低2泊して順応を図ることにした。

この順応訓練中C2での宿泊でも、パルスオキシメーターの値は80%台の数値が得られ、我々はまずまずの自信を得た。

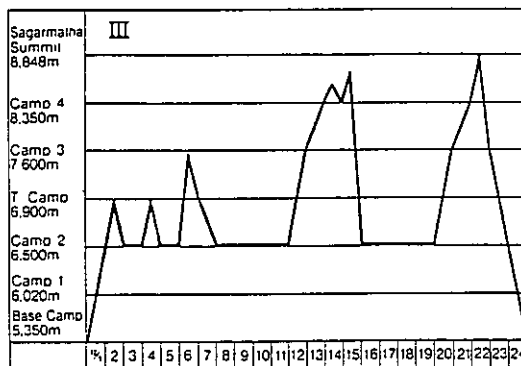
5. 研究論文



H. Nazuka(39)



O. Tanabe(32)



Y. Ogata(45)

登頂日

- I. 名塚、後藤 (12月18日)
- II. 田辺、江塚 (12月20日)
- III. 尾形、星野 (12月22日)

こうしてポカルデでの最後の仕上げを終えた我々はロブジェに戻り、BCに向かった。

11月21日から23日にかけて隊員たちは順次BCに集結した。BCでのパルスオキシメーターの値は84%とシェルパ並みの値を示していた。ちなみにBCの高度は5,350mあり、酸素分圧はシー・レベルの2分の1になる。

こうして高度順応の出来上がった隊員たちは、12月1日の冬期開幕と同時に一気に1,150mの高度を稼いでC2(6,500m)に入った。

そして翌日には単艦岩の仮キャンプTC予定地(6,900m)まで11ピッチのルート作を終了した。BCからわずか2日間で7,000m近い高度まで到達できたのもプレ登山の効果であろう。

また、前回酸素を吸っての行動ながらなかなかペースが上がらず、敗因のひとつにもなったC3(7,600m, 前回のC4)からC4(8,350m, 前回のC5)間の登高スピードも、今回は著しく向上した。前回このキャンプ間の最短所要時間は5時間20分で、時間当たり140mの登高スピード(獲得高度)であったが、今回の最短所要時間は3時間まで短縮し、登高スピードも250m/hrにアップした。

前回行動用に使用した酸素ボンベは、アメリカ・EFI社のFRPコンポジット製のボンベで、内容量は8.43ℓ、充填圧力150kg/cm²、酸素充填後重量6.7kgであった。今回は旧ソ連製のチタン・ボンベを用いた。このボンベは内容量3ℓ、充填圧力250kg/cm²(実際は230kg/cm²程度)、酸素充填後重量3.5kgで

あった。

ポンペを2本担ぐと6.4kgの重量差がつくのでいちがいに前回とは比較できないが、この著しいスピード・アップは、ポンペの重量差を差し引いて考えても余りあるように思われた。毎分2～3割の同じ酸素を吸って5割以上もスピード・アップできたとういうことは、やはり身体が高度にうまく順応していた証拠であろう。ともかく8,000mを超えた高度でも身体が軽く感じられたことは確かであった。

このスピーディな行動のおかげでC3・C4間のルート工作は2日間で終了し、キャンプ移動の時間短縮により、消費酸素量も計画の半分以下で済むなど、ロジスティックスの面でも大いに助かった。短期間の間に3次にわたって6名を頂上へ送ることができたのもこのためである。

このように、キャラバンから登山活動における隊員の動きを見る限りにおいては、プレ登山の効果がすべてよいほうへ作用したように思われた。

南西壁のキャンプ展開

前回の南西壁登攀のキャンプ展開は、軍艦岩の下にC3(6,900m)、灰色の顕著な岩壁の基部にC4(7,600m)、ロック・バンドの上にC5(8,350m)と3つの前進キャンプを設けた。

ちなみに、南西壁を初登攀した1975年の英国隊は、C3・C4間の距離を短くしたため、ファイナル・キャンプをC6として4つの前進キャンプを設けている。

今回は、より短期間で登るために、前回のC3をテンポラリー・キャンプとしてC3(前回のC4)へのルート工作用にテント1張りだけ設営し、ルート工作終了後は撤収することにした。これによってキャンプひとつ分のよけいな荷上げが軽減された。C3への荷上げはC2からダイレクトに行ったので、シェルパの荷上げローテーションも楽であった。前進キャンプの数が少ない、ということはタクティクスも立てやすく、少ないことにこしたことはないのであるが、山容やルートによっても当然違ってくる。

C2(6,500m) — C3(7,600m)

C3(7,600m) — C4(8,350m)

というキャンプ展開ができたのも壁のルートだからであり、これが稜のルートだったら

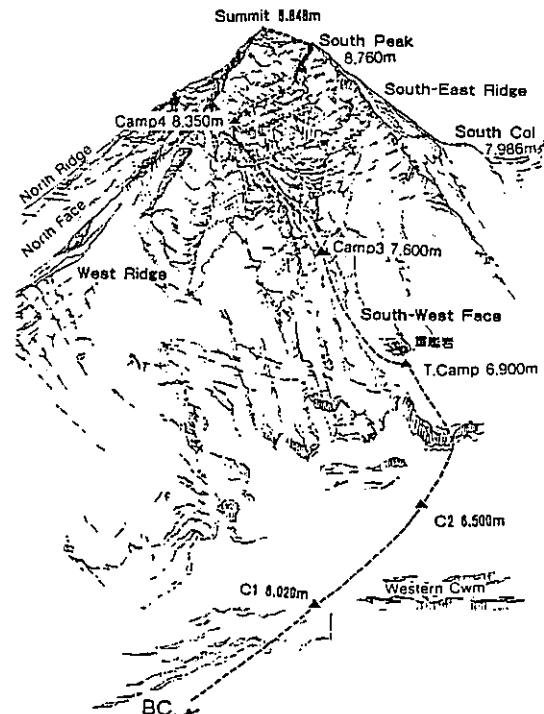


図4

5. 研究論文

こうはいかないであろう。もっとも、このキャンプ間高度差を行動できないようでは、こういうキャンプ展開は図れない。

隊の構成について

ネパール政府は1993年秋から新登山規則の適用を発表した。この改正で一番大きな問題は、高額な登山料値上げ（ひとり1万ドル）と登山隊の員数制限（1隊最多7名まで）であった。

高額なロイヤリティは確かに資金面では痛かったが、隊員数の制限はタクティクスに影響してくるため、より深刻な問題であった。色々手をつくして交渉してみたが、隊員の増員はどうにもならず、規則どおり7名で登らざるを得なかった。この少ないメンバーで15日間で決着をつけようというのであるから隊員が荷上げをする余裕などなく、荷上げはすべてシェルパに頼らざるを得なかった。

今回雇用したシェルパは、サダー2名、高所ポーター28名、キッチン・スタッフ8名、マイル・ランナー3名の総勢41名である。

1975年秋の英国隊が雇用したシェルパ数81名の半数とはいえ、隊員数対高所ポーターの比率は1対4という高率であった。しかし、12月13日までにC4に160kgあまりを荷上げするためには、どうしてもこれだけの高所ポーターが必要であった。

C4の確立とそこへの荷上げが成否を左右する。今回の場合、まず、C3からC4まで無酸素で13kgの荷上げができるシェルパが9名必要であった。前回の経験からこの高度での連続荷上げは難しいことが分かったので、今回はシェルパ3名のパーティを3つ編成、そのローテーションでC4専用の荷上げに当てることにした。

隊員は7名で3パーティを編成しなければならず、どうしても2パーティは隊員2名の編成になってしまう。2名ではルート工作のとき、ロープや登攀具など荷があまり上がらず非効率なので、この2名のパーティにシェルパを1名ずつ入れた。

次に必要なのが、C2からC3までの1,100mを一気に荷上げできるシェルパである。その次が、C1からC2への荷上げポーターとアイス・フォールのルート整備シェルパである。

雇用した28名(途中解雇1名のため実数は27名)のシェルパをその能力に応じて前述した4つのカテゴリーに区分して、シェルパのパーティ編成を行った。さらにこれらの各パーティをスムーズに行動させるためにサダーのひとりナワン・ヨンデンをC2に常駐させることにした。

唯、ここでひとつ問題があったのは、現在サガルマータ登山では、シェルパの日当のほかに各キャンプ間の荷上げ料金が決まっております(別表2)、当然ながら上部キャンプほど

各キャンプ間の荷上げ料金(1993年12月)

キャンプ間	1回目	2回目	3回目	4回目
BC~C1	100R.S	—	—	—
BC~C2	300R.S	—	—	—
C1~C2	100R.S	—	—	—
C2~C3	1,000R.S	1,200R.S	1,500R.S	1,800R.S
C3~C4	2,500R.S	3,000R.S	3,500R.S	4,000R.S

別表2

5. 研究論文

金になるのである。BCへ下るまで24日間という日数であったが、上部キャンプと下部キャンプのシェルパとでは手取り賃金にかなりの差がついた。

ともかく、こうした編成でC3からC4への荷上げも遅延なく順調に運び、登頂へつながった。

南西壁攻略の新装備

前回の反省点のひとつにファイナル・キャンプが確立できなかった点がある。冬のロック・バンドの上のファイナル・キャンプ地点は雪が少なく、猫の額ほどの急な雪壁をカッティングしてテントを設営するようになるのだが、すぐ下の岩が出てしまい、底辺が三角形にしかならず、テントの片方は空間にはみ出してしまいう状態であった。ビバークのような居住性では一夜を過ごすのがやっとで、とても翌日にルート工作するどころではなかった。

そこで今回は、あのロック・バンドの上にかにしてファイナル・キャンプを建設するかが、大きな課題であった。

南西壁は急峻な壁ゆえにいずれのキャンプもキャンプ・サイトに苦勞させられる。前回のC4（今回のC3）では鉄製のキャンプ台の上に厚手のベニヤ板を敷いて、その上にテントを設営した。しかし、これは大変重く、とても8,350mの高度に担ぎ上げられる代物ではなかった。そこで今回は、このキャンプ台に改良を加えた。

まず、材料をチタン製のパイプにして軽量化を図り、ステージの上に載せるボードもベニヤにアルミ・コーティングした薄くて軽い物を使った。そしてそれを極寒・超高所・足場の悪い岩壁、といった条件下で簡単に組み立てられるように工夫した。

こうした改良によって今回のキャンプ台の重量は著しく軽減され、かつ運びやすいように折りたたみ式にしたのでコンパクトに収まった。シェルパたちにも今回のほうが組み立てやすいと評判であった。

8,350mの高所に空中のとまり木のように引っ掛かったC4も、このキャンプ台のお陰で安心して泊まれ、イエロー・バンド下のルート工作も順調に延ばすことができた。

次に酸素ボンベであるが、今回も冬期登攀の凍傷予防も兼ねて積極的使用することにした。具体的には、C3（7,600m）から睡眠用と行動用に酸素を使った。

前回使用した酸素ボンベは2種類で、ひとつは従来のフランスAMP社のヒマラヤン・タイプ（内容量4ℓ、充填圧力200kg/cm²、ボンベ重量4.4kg、充填後重量5.54kg）。もうひとつは最近脚光を浴びているFRPコンポジット製のボンベで、アメリカのEFI社のものを用意した。このボンベは6061アルミ合金のシームレス・アルミライナーにエポキシ樹脂含浸の高強度ガラス繊維を2種類のフィラメント・ワインディングで多層に巻きつけたもので、3タイプを用意した。（規格は前述した）。

冬期ということで低温による圧力低下はそれなりに予測したつもりであったが、実際は予測をはるかに上回り、著しい圧力低下が見られた。ちなみに、前回のC4での圧力チェックでは、AMPボンベ

5. 研究論文

が平均で150気圧、FRPポンベが平均100気圧という圧力低下を示した。

このように、せっかく重量が軽く、内容量の大きいFRPポンベを用いても充填圧力が150気圧ではメリットが少ないように思われた。そこで今回は、旧ソ連製のチタン製酸素ポンベを用意した。これは内容量が3ℓと2ℓの2タイプがあり、充填圧力は250気圧でポンベ重量は3ℓタイプが2.5kg、酸素充填後重量で3.5kgという軽さである。

また、レギュレーターも超軽合金で軽く、マスクに延びる耐圧ホースの途中にはフローゲージが付いており、酸素が流れているかどうか目視できるのである。

マスクはメイタグ・マスク・タイプのためエコノマイザーは不要で、従来のH型マスクより使い易いように思われた。

これらの改良及び新装備が今回の冬期南西壁攻略に大きく寄与したのは確かである。

冬期南西壁の風

風については、前回の12月25日にウェスタン・クムで味わったような、何もかも吹き飛ばしてしまうような烈風は、今回なかった。というよりは、あの冬の嵐が来襲する前に決着したので、味わうことがなかったのであろう。

唯、サガルマータを取り巻く稜線の風は相変わらず凄まじく、C2に居てもサウス・コルや西稜からは動物の唸り声を思わせるようなゴウーゴウーという咆哮が聞けた。

南西壁自体は南稜と西稜に囲まれているため、これら稜線を吹き荒れる烈風に直接さらされることはない。

南西壁で強風にさらされるのは、TC（軍艦岩）の上2ピッチ目から1975年英国隊C4跡地までである。この区間は西稜の肩を吹き抜けた風が壁を這うようにして吹いてくる。その上の大中央ガリーに入ると、南西壁はコンケーブ状（凹状）をなし、旧ソ連ルートのパイラーと南稜にブロックされて、風は弱まる。唯、ここでは上部の右クローワールから吹き降ろしてくるブリザードをかぶることになる。

C4から先のイエロー・バンド下のトラバースも西稜にブロックされるため、強風は避けられる。そして南峰ルンゼに入るころになると、頂上を取り巻く強風にさらされるようになる。ルンゼ内を登るため下から吹き上げる風となる。南峰のコルに立つと西からの強烈な烈風をまともに受けるようになり、まさに耐え難いほどの強風である。どこにも逃げ場のない稜線上にあって、たった1箇所、ヒラリー・ステップ取り付けのところがエア・ポケットのように風が当たらない。

今回、3次にわたるアタックで6名が登頂できたのも、このように、南西壁ルートは稜線ほど風の影響を受けないからである。

おわりに

こうして、冬期サガルマータ南西壁への再挑戦は、女神の微笑に恵まれて成功裡に終了し、2年前の雪辱を果たすことができた。

5. 研究論文

3次にわたる頂上アタックで6名が登頂できた要因はなにか。

やはり一番は、プレ登山による完璧な高度順応だったと思う。9月から11月にかけての負荷と休養によるものである。今回の最良であったかどうかは判断し難いが、結果は最高に近いものであったと思われる。完璧に近い高度順応はスピーディな短期決戦を可能にし、大量登頂にむすびついたと考える。

前回の失敗から徹底的にタクティクス、装備、その他について研究・検討・改良を加えたことが根幹をなしている事は勿論である。

さらに、2度目ということで、絶対に失敗は許されない、というプレッシャーが壮絶なまでに隊員の闘志を駆り立て、頂上への執念を生んだことも見逃せない要因のひとつであろう。

我々はほぼ完璧に近いかたちで困難な登山をやり遂げた、という満足感と自負はある。しかし、2度目ということが、何がなんでもの思いを強くさせ、それが厳密に考えれば「最も厳しい自然条件の真冬」ではない時期の登頂となった、という我々の印象はぬぐいきれない。

今回の我々のサガルマータ南西壁の冬期初登攀は、次の「真の厳冬期登山」へのワンステップとして位置づけておきたい。

(サガルマータ南西壁登山隊副隊長)